

会員研究

華やかな若狭武田家の全盛時代

高野 賢彦

甲斐の武田本家は鎌倉時代に蒙古勢が侵入してきたとき幕府執権の北条時宗の命令で安芸へ移り住み、室町時代には第六代將軍足利義教の命令で一色義貫という大名を殺害して若狭へ移住した。その結果、甲斐、安芸には傍系の武田家が残ったため若狭の本家ともども三家が戦国時代を迎えた。しかし若狭の本家を最後として十六世紀にすべて滅亡した。その中でも甲斐、安芸に比べて若狭の華やかな存在が注目に値する。

若狭初代の信栄は安芸の武田信繁の嫡男であったが、奈良の斑鳩の陣中にいたとき將軍義教が強権を發動して大名の一色義貫を殺害するよう命令してきた。信栄はやむをえず義貫に朝食を差し上げたと言つて招き寄せて謀殺しようとした。しかし敵もさる者、察知されて失敗し、双方伐り合いになつて信栄は重傷を負つてしまつ

た。それでも義貫の若狭を拝領し、移り住んだものの傷が悪化して二月ほどして大飯高浜の長福寺で死去した。その間功績として京都建仁寺に塔頭十如院を建立したことが挙げられよう。

甲斐から安芸へ移つた武田は長年にわたつて合戦に次ぐ合戦を繰り返したが、西に周防の大内氏、南に嚴島神主家の桜尾城、北に毛利氏、東に大内氏の鏡山城など強大な勢力が存在していたので安芸を統一することができなかった。信賢や弟国信はそのことを骨身に感じていたので小国とはいえ意外に早く若狭を統一できたこと、それに一山を越えれば京の都へ行けたことを殊のほか嬉しく思った。

世の中が騒然としていた応仁元年（一四六七）一月一五日に信賢は国信を伴つて幕府の管領細川勝元邸へ赴いて謀議をめぐらし、その三日後の一八日に応仁の乱が勃

発した。信賢は東軍の有力武将として華々しい活躍をし、「宗賢」と号していたが、その死にざまは如何なるものであつたかまつたく分らない。橋本博氏の『大武鑑』によれば、妙心寺の玉鳳院が信賢の香華地であるので妙心寺付近の合戦で討死したのではなからうか。

信賢は背丈が格別に高い虎賁猛将とたたえられていたのでそれに相応しい死にざまであつたものと思われる。法名は大通寺殿大入宗武大居士であるが、仏国寺本系図によれば、信賢が建立したと思われる若狭の光徳寺には光徳寺殿道祐教山大居士という別の法名が存在している。

当時、守護大名は幕府の所在地に住む決まりであつたので信賢から国信、そして四代目の元信はいずれも京都に住み、五代目の元光が初めて京都を引き払つて若狭小浜の後瀬山に本格的な築城をして戦乱に備えた。その後は内憂外患にみまわれて次第に衰亡の道を歩み、八代目の武田元明が明智光秀に加担して丹羽長秀の佐和山城を攻め落したが、光秀の敗北によつて結局は琵琶湖北岸の海津で切腹のやくなきに至つた。ここでは若

狭武田家全盛期の国信、元信、元光の三代について概観してみたい。

一、武田国信（將軍家の御供衆・一代風流の老将）

武田大膳大夫伊豆守信賢という大丈夫の死去後、跡目を継いだ弟国信は兄と同様に彦太郎と呼ばれて治部少輔、大膳大夫となり、若狭と丹後の守護職と安芸分郡守護職を拝命し、同時に武田本家の継承者として伊豆守に叙せられた。

国信の嫡子信親の菩提寺栖雲寺の文書によれば、その昔三代將軍の足利義満が丹後の切戸文殊へ参詣の帰途、小浜へ何回か立ち寄つて玉花院や栖雲寺を宿とし、浴室を造くり、あるいは改造して両寺の間に黒木の渡し廊下まで造つた。

若狭歴史民俗資料館の『中世若狭』によれば、国信の菩提寺玉花院は浅間の東光寺の山号が玉花山であるのでその辺りにあつたものと考えられているが荒廃したらしい。東光寺がその跡地に造られたのであろうか、いずれにしても国信の墓が見当たらないのは不思議である。私もその付近を歩き回つたが、古い歴史が心にしみるよう

な落ち着いた地域である。

応仁の乱で東軍に属した信賢と国信が五月二十五日に將軍義政の花の御所を城に構え、その翌日に西軍の一色義直邸を火攻めにした。その一方で一説に西軍の本陣である西陣近くにあった武田邸も焼打ちされたようである。

武田方は六月十四日に安芸から付き従ってきた白井備中守（出自は千葉梶白井市）が討死するなど八十人が戦死したが、この敗北は兵力が少ない武田方にとって大きな痛手であった。八月二十三日には周防の大内政弘が大船団を組んで上洛し、西軍に加わったので騒乱は拡大の一途をたどり、武田家も安芸から信賢・国信の末弟元綱が上洛してきた。

信賢は翌年八月に家老の逸見弾正繁経を山科に陣取らせ、また九月に足利義視が三井寺へやって来ると国信を迎えに行かせた。そして文明元年（一四六九）四月に一色義直の丹後を制圧して丹後守護職を賜わった。

ところが逸見弾正が戦死するなど払った犠牲は大きく、また東奔西走・八面六臂の活躍をしていた信賢も文明二年（一四六八）六月

二日に急死してしまった。京都の南部、妙心寺辺りの合戦で戦死したものと思われる。

国信は若狭と丹後の守護職、それに安芸半国（佐東郡・安南郡・山県郡）の分郡守護職を引き継ぎ、弟元綱は安芸に住むようになった。なお若狭武田家は武田の総本家として新羅三郎義光以来の膨大な家宝を安芸の金山城で保存していたが、その多くは後の滅亡時に傍系の周防武田家へ引き継がれた。特に貴重な義光の鎧は大内義隆に分捕られ、また貴重な歌集である八代集秀逸は周防へ持ち去られたが、鎧は義隆が厳島神社へ寄進したので現代は国宝として保管されている。

文明五年になると、西軍の山名持豊と東軍の細川勝元が相次いで死去、ここに和議が成立した。国信は東軍を代表して和議に参画したが、和議とは名ばかりで戦乱は全国へ拡大し、いよいよ戦国時代に突入していった。

国信は乱の終結後、丹後守護職を旧主の一色義春へ返付したが、家老の逸見真正は丹後戦線に深くかかわってきたため返付を不満として丹後へ攻め込んだ。しかし利

あらずして自害した。国信はこれを哀れんで出家をし、宗勲と号した。

国信はのちに「一代風流の老将」といわれ、心敬、宗祇、宗長など当代一流の連歌師と深く交わり、『新撰菟玖波集』に宗勲法師として多くの句が載せられている。歌詠みの多い武田一門の人脈の中でその存在は傑出している。

『広島県史』によれば、国信は文明十年（一四七八）二月に子信親・尚信兄弟を大御所義政・將軍義尚父子の御供衆として出仕させ、六、七月には犬追物、蹴鞠、笠懸などを披露させた。そして滅多なことでは若狭へ帰らない国信がその年十二月に帰国すると、京都では天下様は一体どうなるのだろうかと不安視された。国信は將軍から可愛がられ頼りにされていたのである。

文明十五年六月、將軍職を退いて久しい義政の東山山荘（銀閣寺）が完成すると、国信は家老逸見三郎を遣わして祝意を表した。このとき幕府は第一の寵臣国信を山代の国の守護職にしようとした。しかし国信は畏れ多いと言って辞退した。

この頃の国信は絶頂期にあったが、文明十七年八月二十二日に思わず天を仰いだ。『小浜市史』によれば、將軍義尚に大層可愛がられていた嫡子信親が二十四歳の若さで死去したのだ。なお信親の年齢は史料によつて食い違いがあり、また將軍義尚から一時を賜わったものと思われる尚信はどのような人物であろうか。のちに取り上げる元信とは別人であると言われている。

將軍義尚は長享元年（一四八七）九月十二日に神社領を横領した六角高頼を退治するため近江に出陣した。しかし意外に手間取り、その翌々年三月二十六日に鉤陣中の真宝館（栗東市）で病死した。享年二十五。国信は義尚の亡骸に付き添つて京都へ帰り、その日のうちに若狭へ下った。

国信は従四位下（一説に従四位上）を賜わつて將軍に近侍し、ずつと合戦と風流に生きてきたが將軍陣没は筆舌に尽くしがたい衝撃であり、若狭へ帰つたまま京都に戻ることなく翌延徳二年（一四九〇）六月二十一日に死去した。享年五十三。法名は玉華院殿功林宗勲大居士である。なお猪俣安定氏は『若

狭守護代記』で国信の死は一年後の延徳三年としている。

二、武田元信（将軍家の御供衆・貴族趣味の従三位）

元信は国信の二男であり、国信の跡を継いで若狭・丹後、そして安芸分郡守護職に就いた。京都で生まれ、十一歳で元服して管領細川勝元から一字を賜わり、武田が世襲してきた治部少輔、大膳大夫に任ぜられ、かつ本家伝来の伊豆守に叙せられた。

また明応十年（一五〇一）正月十日に従五位下から越階して従四位下に叙せられ、さらに死の直前の大永元年（一五二一）十月十日に禁裏北門修理料として五千匹を進上して当時の武将としては異例の従三位を賜わった。

武田系図によれば、元信は文筆、華道、弓馬に堪能であり、書の腕前も「二楽軒」を称していた飛鳥井雅康に筆法が似ていたのだから「若狭二楽」と称した。父国信は「一代風流の老将」といわれたが、元信はその父を凌駕して若狭の文芸を盛り上げた。

朝廷も元信の多才を嘉して桐紋を下賜し、塗輿の礼式を許したが

武田三家を通じて元信ほど高貴な処遇を受けた人物は見当たらない。武田家中興の祖といわれている安芸の武田信武が足利尊氏から朱の采配を使うことを許されているが、元信には遠く及ばない。

元信は安芸分郡守護であったので安芸の叔父元綱や従弟の元繁（武田山金山城主）が大内氏など外敵に攻め込まれたときは大いに支援し、白井氏など軍勢を派遣している。しかし元信は合戦に敗北すると、幕府に引退願いを出した。これは元信が風流に生き甲斐を求めていたからであろう。大森宏氏は「戦国若狭」で信賢と国信は戦国大名を目指していたが、元信は貴族趣味、これまでの方針は挫折したと述べている。

元信は三条西実隆など公家衆と深い付き合いをしていたため度々季節の贈り物を届けていたが、そのほか禁中警備や将軍が参内するとき辻警護に立つのはもちろんのこと、種々こまやかな気配りを怠らなかつた。

元信は自分の死期を悟つたのだろうか、大原陵路氏によれば、永正十六年（一五一九）十一月二十六日に出家して「紹壯」と称し、

跡目を次子元光に譲り、大永元年（一五二一）十二月三日に小浜で死去した。享年六十七。その死は甲斐の武田信玄が生まれた一か月後であり、法名は仏国寺殿大雄紹壯大居士と贈られた。私は八十歳を過ぎてなお覇気のある原田湛玄住職に元信の位牌を見せていただいたが、そこには「仏国寺殿高祿大丈夫大雄紹公大禅定門 神儀」と書かれていた。

なお仏国寺には武田系図（仏国寺本）が保存されている。これは武田本家である若狭武田家の最後の当主武田元明が明智光秀に加担した科で豊臣秀吉の命で琵琶湖北岸の海津で自害させられたが、その遺命で同寺に納められたものである。元明は高島市マキノ町の宝幢院に埋葬されたが、元明の子と称する木下勝俊（長嘯子）の子孫によつて仏国寺の元信の五輪塔の横に元明の五輪塔が建てられた。

三、武田元光（後瀬山に築城・内紛勃発）

元信の次に第五代の守護職に就いたのが次子元光である。しかし、この間傍系の安芸武田家が自立したため安芸分郡守護に就くことは

できなかつた。畠山修理大夫義統の娘を母とする元光は寅年の明応三年（一四九四）生まれ、甲斐の国を統一した虎賁猛将武田信虎と同年生まれである。

元信の長子は故あつて出家をし、建仁寺の二八二世住職となつた潤甫周玉である。歌を格別に好む元光は海抜一八六m余の後瀬山から小浜湾を眺めながら歌を詠んだであろうが、武田系図に「今こそあれわびしにたがふことのはよよのむくいは君ものがれじ」という歌がのせられている。

若狭武田家は弓馬の家であつたが、元信以後は合戦が得意とは言えなかつた。大永七年に丹後勢が京都に迫つて来たとき元光は桂川で大敗を喫し、近江へ逃れた。また同年丹後の海賊衆が若狭へ攻め込んで来ると丹後の加佐郡へ軍勢を進めたが、支援に駆けつけて来た越前の合力衆が三方郡で乱暴を働き、これを鎮めるのに手を焼いた。

将軍義晴は元光が築城してから若狭に在国していたため天文三年（一五三四）に御内書を発し、元光か子の信豊のいづれかが上洛するようにと要請してきた。

義晴は自分の身辺に不安を感じ、代々忠節を尽くしてくれた若狭武田家を頼りにしたのである。その翌年であろうか、元光は入道して「宗勝」と号した。

『小浜市史』によれば、天文七年二月に丹後加佐郡に在陣していた元光の家老栗屋元隆が突然帰国し、谷田寺（小浜市）で武田勢に合戦を仕掛けてきた。元隆は丹後へ敗走したが、これは元隆が元光の嫡子信豊を廃嫡して弟信高を跡目にしようとしたためであるが、元光は幕府を通じて朝倉孝景（夫人は元光の妹）の支援を得てようやく取り鎮めた。

信高は胆力があり、夫人は細川幽斎の姉であったという。元光は一旦緩急があれば幕府に泣きついた。しかし元光自身の力が落ち、幕府の権威が衰え始めると、家老衆の力が次第に大きくなってきた。元光は天文二十年（一五五二）七月十日に死去、享年五十八。法名は発心寺殿天源宗勝大居士である。小浜を訪れたとき原田雪溪住職にお目にかかって見せていただいた元光の位牌には「発心寺殿贈従三品前光禄大夫源勝公大禅定門 神儀」と書かれていた。

以上、武田本家の国信、元信、元光について述べた。そして朝廷や将軍家との華やかな関係はもちろんのこと、初代信榮が重傷に苦しみながら建長寺に十如院という塔頭を建立したことからも多くの武田人が住職や僧侶になることができたのも若狭武田家の大きな特色であると思う。やや時代はずれているが、これらの特色は京都から遠く離れていた山峡の甲斐国の信虎や信玄の時代とは比べようもない。

主な参考資料

- 『若狭武田氏の文芸』 米原正義 『日本歴史学会』 一五七号
- 吉川弘文館
- 『若狭武田氏と禅僧』 米原正義
- 『小浜市紀要』 小浜市編纂室
- 『若狭武田氏の盛衰』 大森 宏
- 秋田書店 「歴史と旅」 に掲載
- 『八代集秀逸』 岩波文庫
- 『王朝秀歌選』 岩波文庫
- その他



武田元信の墓(右) 仏国寺



武田元光の犬追物検見の像 発心寺所蔵